

巻市の起源

巻の市は、伝説では行人（ぎょうにん）の守り本尊であった仏様が、神明サマのまわりのヨシの中で毎晩光っていたので、多くの見物人が押しかけるようになり、その見物人目当ての商売が行われるようになったのが始まりと伝え、市は新町(二区、一区の一部)に開設されたといわれている（『巻村史話』巻町双書⑥斎藤順作）。そもそもその歴史は古く、『西蒲原郡志年表』（栗原九十九編）によると、巻町六斎市の所見は、元和9年（1623）12月、松平越後守が月次市日を改正した折、巻は四、九の日と定めたと記録されている。従って、少なくともそれ以前から存在したと考えられる。

巻の市は、江戸時代においても繁盛していたことが、いくつかの古文書からうかがうことができる。明治20年頃には、市場の場所割などの采配は興業師の掌中にあり、その頃は内山家を取り仕切り、戦中の昭和17年から20年頃の物資欠乏により、市がなくなるまで取り仕切っていた。

昭和20年秋、町の復興に市をたてようと波勢屋主人河治忠が発起人となり、巻町で采配を振っていた内山の妻ミヨと内藤直作、および役場職員らが相談し、市の再開となった。この頃は、露店商の管理、許可権は警察署長の権限であったが、やがて地方自治体に移された。しかし、実質的には明治以降の露天商（原文ママ）の縄張りを持っていた内山の手中にあった。そして実務は身内の内藤直作（直七）が行っていたが、昭和33年3月「巻町露店市場管理条例」が制定され、町役場が管理運営することになった。なお、戦後の市再開に際し、内山ミヨの発案で、昔からの市日が四、九日で、「シク（四、九）ジリ市」といわれるほど低調であったので、商人や出店者の人たちの支障のない五、十日にしてから、市が繁盛するようになった。

最初に市が開かれた場所は、榎神社門前であったが、終戦後は門前を中心に渡り場小路（四ツ谷通）までの両側に出店し、次第に出店者が増加すると本町通りの二区から八区あたりまで延びる盛況さになってきた。しかし、昭和32年に交通の妨げになるからと、はじめは片側出店になり、さらにその年には仲江通りに市場が移転した。そして、その通りは、いまでは市場通りといわれるようになった。

巻市の出店者は、戦前は内山清吉、中山万蔵、金山ツイ（八王子屋）、安右衛門、栄四郎等が常

連であったが、時期によって人参や牛蒡、さつまいもなどを持った間瀬の人や、囲い簀を持った野積浜の人たちがきたり、漆山の人たちが農閑期仕事に編んだなわしろや菅むしろなど十枚ずつたばねたものを担いできて出店した。また、松野尾の人たちは、漬け大根を馬車に積んできて、本町通りの両側に並べ、遠藤や鎧潟周辺の人たちは、潟でとれた川魚を焼いて串にさして持ってきたり、河井の人たちがわらみのを持ってきて店を出したりした。

仲買人を通じて巻市で売られる品物もあった。角田浜では、夜なべ仕事に小前縄を編み、また11月12日、妙光寺の報恩講で宿をくじ引きできめ、友人同士がわらを持ち寄って夜10時頃まで夜なべで編んだ。この小前縄を長さ1丈6尺を1把とし、10把で1束にして、巻市が近づくと仲買人へ届けて売ってもらった。

戦後になると出店者の半数は、巻町や白根市の露店商人が占めるようになり、ついで新潟市・吉田町・燕市などの人々が衣料品をはじめ、乾物類や鮮魚類を持ち込んで売ようになった。現在（平成の初めころ）の出店数はおおよそ160軒。そのうち衣料品を取り扱う店が38%、青果物店が19%、乾物商が13%、鮮魚商が6%、菓子店4%で、他は日用品雑貨その他を取り扱う店である。

巻市へ買い物にくる人々の範囲は、おおよそ半径6キロメートルに及び、巻町および周辺集落は勿論、新潟市・潟東村・中之口村の一部、吉田町の佐渡山・西楨、岩室村の富岡・津雲田・原・西中・北野・岩室・間瀬からも人々が出掛けてくる。それも空荷で町へ行くのは病人くらいのもんだといわれたというように、たとえば仁箇や竹野町・福井の人々は、ビンビラでかき寄せた松葉をかついで市に出掛け、その帰りに日用雑貨などの買入れをしていた。仁箇や竹野町の山は植林の山でなく、いわば実生で育った松林である。山の手入れは夏の土用に入って下刈りをし、翌年4月上旬頃から春田前に、枯れた枝を切ったり、拾ったり、松葉をビンビラでかき寄せた。これらを長さ1メートル、直径30センチメートルくらいにし、外側に松の枝、中身に松葉を入れて束ねる。多い家で150束くらいかき寄せたといい、山持ちでない人たちは、山持ちの家から山を借りて作業をした。その返礼として、田植え、田の草取り、稲刈りなどの仕事を手伝い、相応の手間返しをした。もちろん、かき寄せた松葉は、巻市や曾根の市にかついで出掛けただけでなく、自家用にも使っていた。